

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

非水百花譜

第五輯

大正

9 4 28

丙寅

始



ほととぎす

學名 *Triopteris hirta* Hook.

漢名 油點草

英名 Japanese Food Lily.

科名 百合科 (Liliaceae)

Tripteris Thunb., *Kyriocostis Conaway* 即ち下部に袋を有せる三個の外花被を有するに依り命名せられしものにして、又 *hirta* は *hair* を意味し葉葉共に細毛を以て蔽はるゝが故に名づけられしものにて *Compositus* とも稱せらる。

各地の山間陰濕の地に生じ根莖を有する多年生草本にして本邦の外、ヒマラヤ、及び支那に原産する極めて小なる一属なり。

葉は互生し、狭長圓形にして先端尖り、長さ三乃至五寸、細毛を有し、下部に於て心臟狀の稍葉を爲す。而して根莖産のものを除けば多くは葉脚面に油を點したるが如き斑點あり。莖も亦柔き白色細毛を以て蔽はれ、夏秋の候、一二尺に生育し、葉腋より稍長き小花梗を出し六乃至十五の小花を房狀又は半繖房狀に着生す。

花は白色を帯びたる淡黄緑色にして、鐘狀をなし、優美なる暗紫色の斑點を有す。六個の花瓣は内外三個づゝに分たれ、外部のものは基部に於て膨起し、袋狀の蜜槽をなし、特に大なる蜜點を印す。内部のものは扁平にして共に上向して開花す。

六個の雄蕊は花柱を圍みて長く延び、開平し、葯は十字樣にして外向す。子房下位にして花柱三稜形をなし、柱頭三裂、毎片又又裂し外反す、子房熟して胞間裂開をなす所の蒴果となり、種子は圓形にして扁平なり。

備考

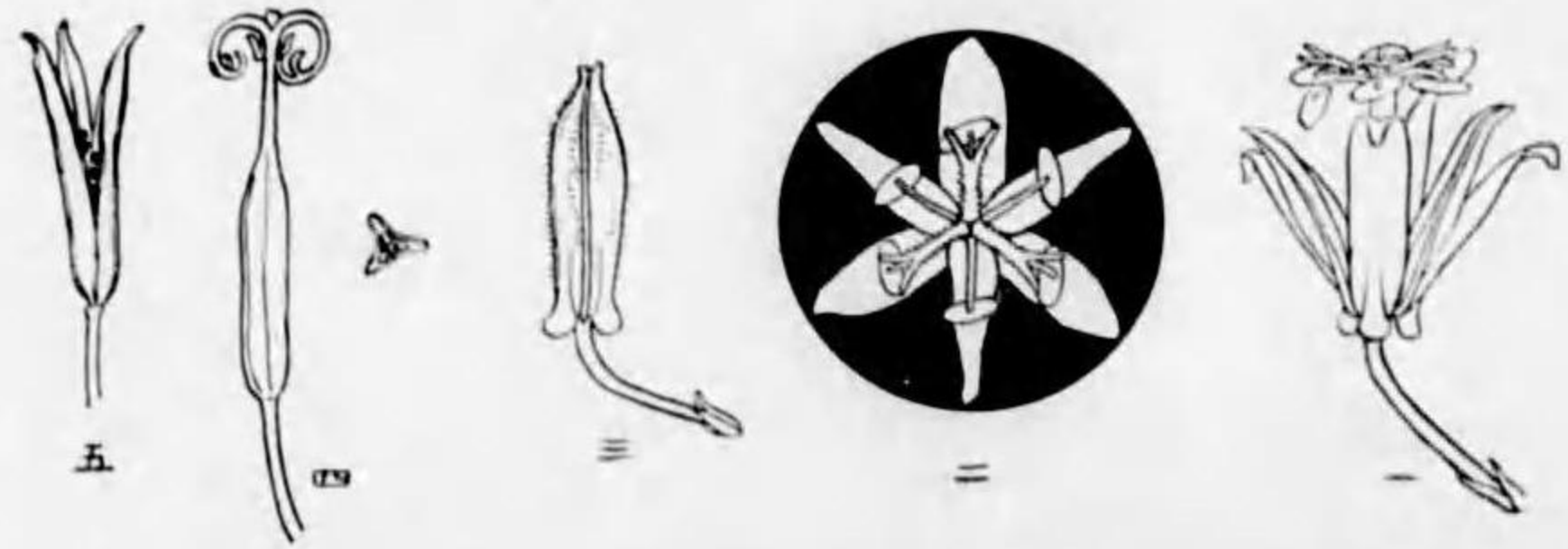
一、學名を *Triopteris japonica* Munj. とすものあり。

二、觀賞用として栽培せらるゝ事あり。

本圖 大正七年十月十日東京郊外日暮村に於て寫生(自然大)

附圖 (一)花の側面 (二)花の上面 (三)花蕾 (四)蒴果及其横斷面 (五)裂開せる蒴果 (六)印葉 以上全部自然大(五)は二十五日寫生)

寫真 大正八年十月東京に於て著者撮影



非水百花草譜第五輯目次

ほととぎす (油點草)
 ききやう (桔梗)
 らしやうもんかつら (羅生門葛)
 はまなてしこ (濱撫子)
 もくせい (木犀)



ききやう(桔梗)

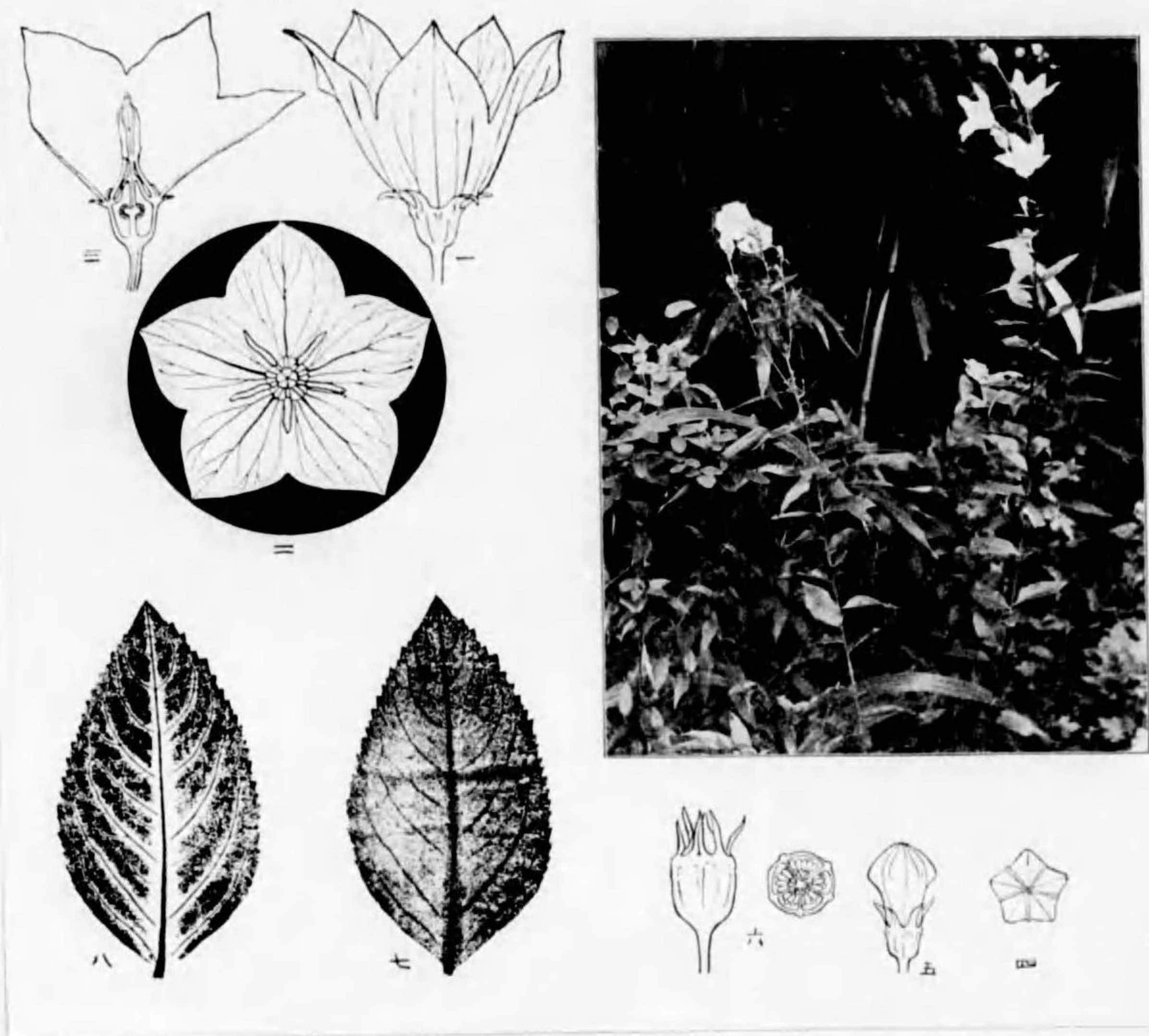
學名 *Platycodon grandiflorus* DC.
 異名 きちかう、ありのひふき、をかとき、佛吉草、
 ひとへぐさ、あさがほ秋の七草にて)

漢名 桔梗

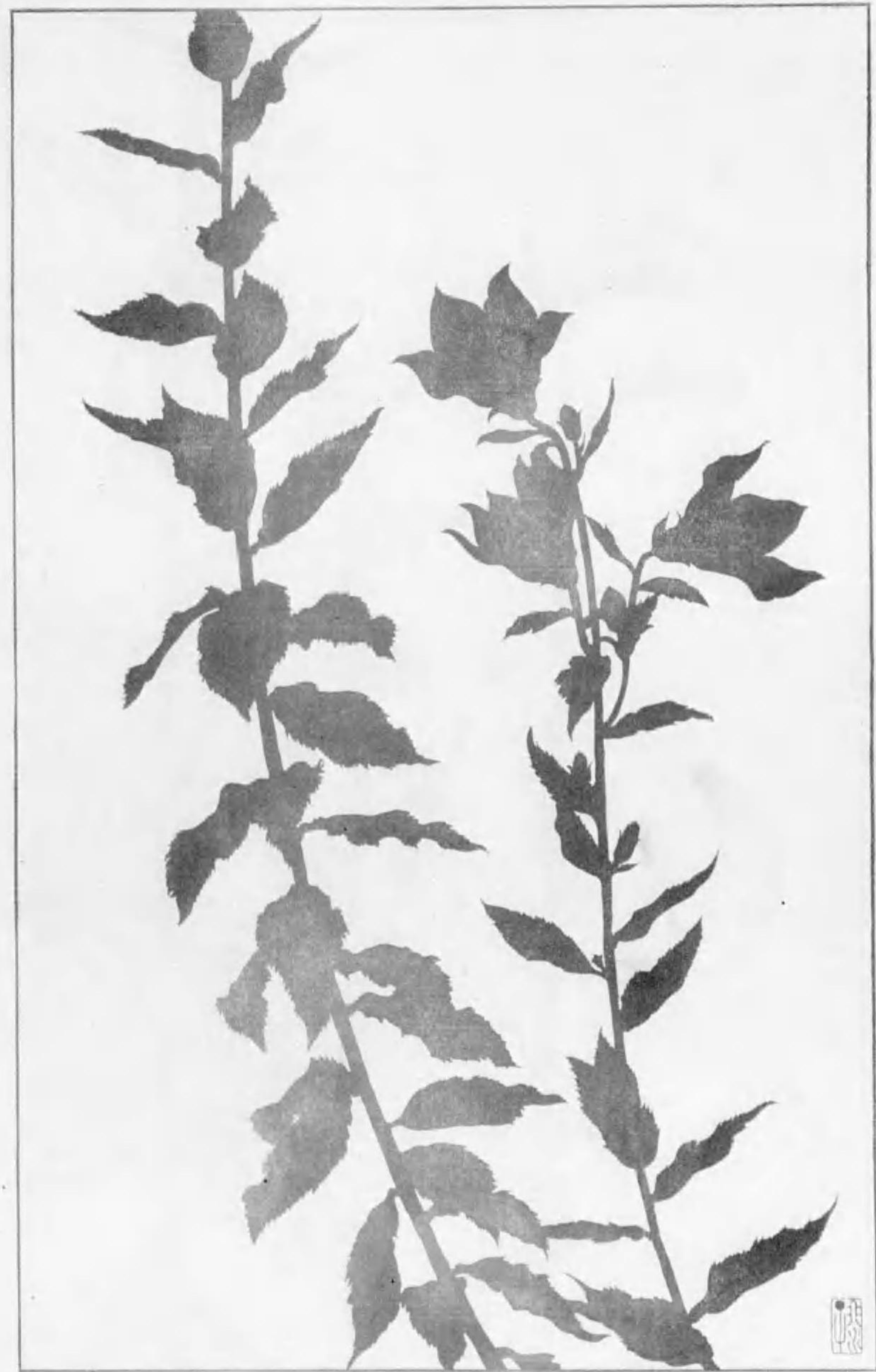
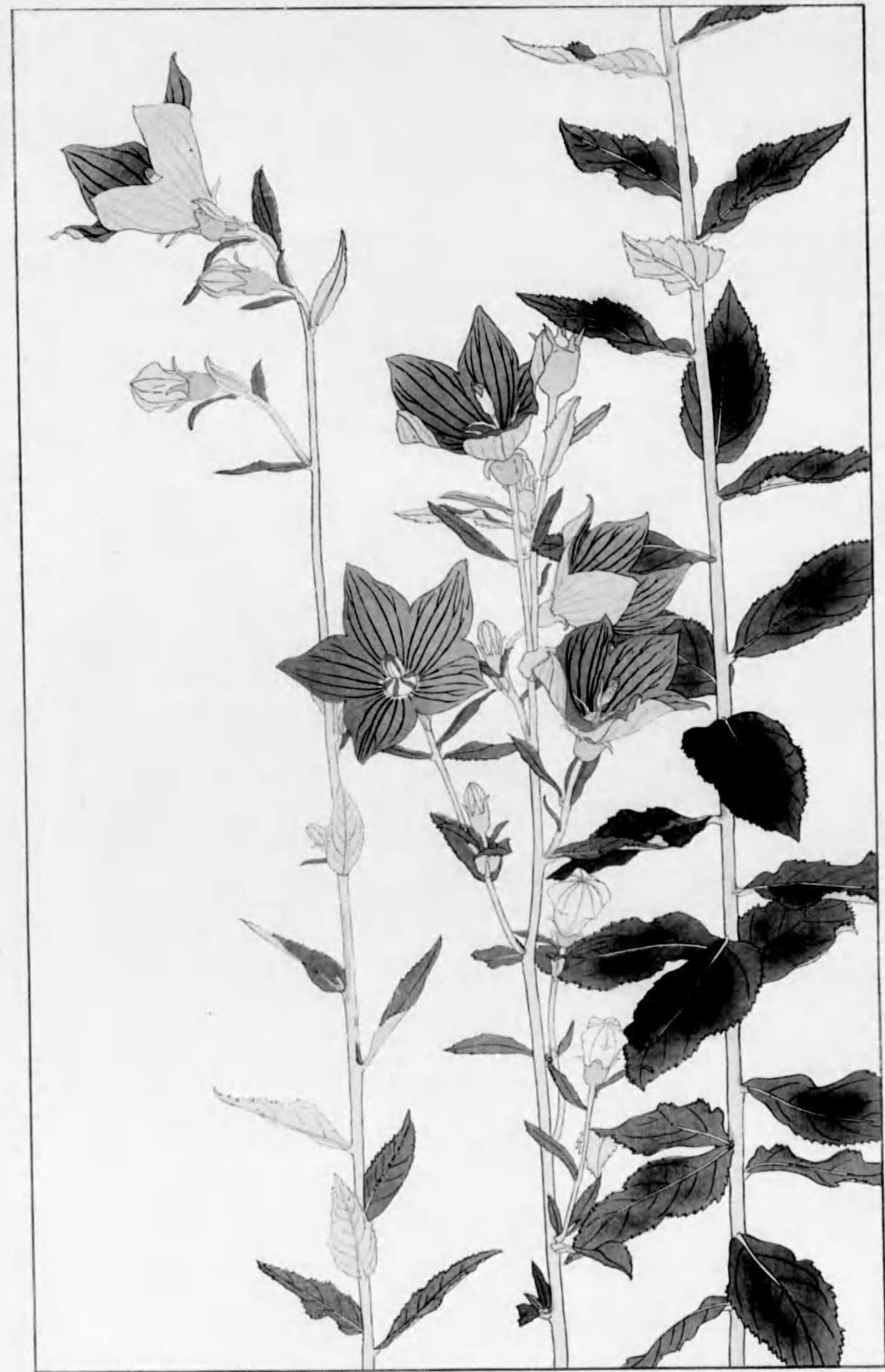
科名 桔梗科 (Campanulaceae)

本邦各地の原野に支那、朝鮮、西比利亞の各地に自生する宿根性草本にして地下には肥厚なる紡錘状の直根を有す。春期此の紡錘根の上端發芽部より芽を生じ、二三尺に生育して夏期鐘状の花を開く。
 葉は一種の乳管を有し、白色の液體を蔵す。葉は無柄にして尖端鋭れる長楕圓形又は披針形をなし、多くは互生すれど、或は對生、輪生するものあり。縁邊に細鋸齒あり、上面は綠色なれど裏面帯白色を帯ぶ。
 葉の裂片は三角狀披針形にして子房を包み、花冠は紫藍色を呈し廣き鐘状の合瓣花なれど、先端五個に分裂す。放射相稱にして雄蕊五個、雌蕊一個を有し、花絲は短く下部擴大、毛茸ありて子房を包む。葯は分離し、内向して生ずれど開花すれば星形に開裂し淡黃褐色を呈す。心皮は五個ありて合着し、花冠に對生す。花柱亦合着し、柱頭五裂、毛茸を生じ、各裂片は狭長にして反曲するに至る。子房下位にして五室に分れ、成熟すれば略々倒卵狀球形の蒴をなす。胚珠は倒生にして無數あり、中軸胎座をなす。果實は蒴果にして頂端に於て五個に裂開し細小、皮堅質をなし平滑なる種子を散す。胚乳は肉質にして胚は眞直なり。
 本種の花は雄蕊先熟にして葯は開花せざるに先ち既に花粉を放出し、葯は内向せるが爲に之を柱頭に附着せしむ。
 主として觀賞用として栽培すれど又若き葉を食用となし、根を藥用となす。藥價値としては呼吸器病(肺氣、五臟胃腸の病)を治すと云ふ。又朝鮮にては根を食用となすと云ふ。
 (あさがほの稱號を以て古來秋の七草の一に數へらるるもの)

本圖 大正八年七月卅一日東京に於て寫生(自然大)
 附圖 (一)花の側面 (二)花の縱斷面 (三)花の正面 (四)花蕾の上面 (五)花蕾の側面 (六)蒴果及其橫斷面 (七)(八)印葉(全部自然大)
 寫真 大正八年七月東京郊外に於て著者撮影



油 點 草
 杉浦邦永畫
 大倉平兵衛
 田口貞松
 春錦堂發行
 四國印刷本日本東京



らしやうもんかつら (羅生門葛)

學名 *Nepeta Urticifolia* Biss. et Me.

異名 るりちやうさう。

科名 唇形科 (Labiatae)

蓬蘽草 (カキトホシ) 属の草本にして山麓原野の陰地に多く生ず。葉は方形にして長く地に匍匐し、先端の成長部のみ上向き高さ一二尺となる。葉は先端尖れる卵状心臟形にして鋸齒あり互生す。下部のものは長き柄を有すれど成長部に近き葉は柄と無柄にして葉を抱く。春期頂梢に近き葉腋毎に一花を開けども葉は殆ど接して生ずるが故に恰も層をなせるが如く、各葉層よりは二花を生ずるが如く見ゆ。而して必ず一方に向ひて開くの特徴あり。花は紫色にして合着し長さ一寸許りの美しい唇形花をなすと、他の多くの同科植物の如く明瞭なる二唇をなさず。萼は筒状にして平行せる十五條の肋を有し、其の縁邊五個に分裂す。雄蕊四個、後方の二個は長大にして前方のものは短く、一柱頭と叉状をなせり。而して筋は初めより開出し、後互に反対なる方向に開出する葯室を有す。

子房は四分し、各小房は倒卵形をなし、乾燥せる外果皮と基底に小なる附着面を有す。種子は眞直にして、且眞直なる胚を藏す。

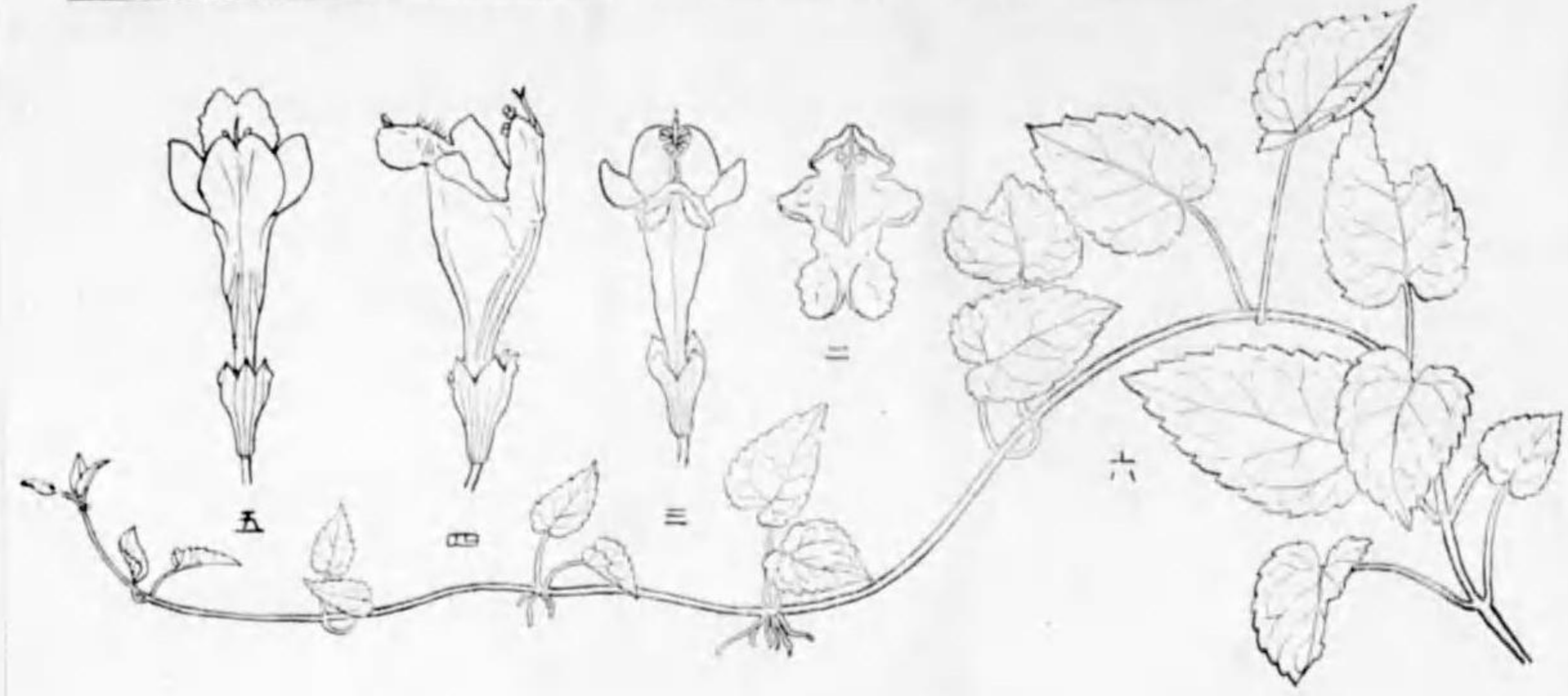
備考

一、學名として *Mecostema Urticifolia* Kuntze (Makino) を用ふるあり。

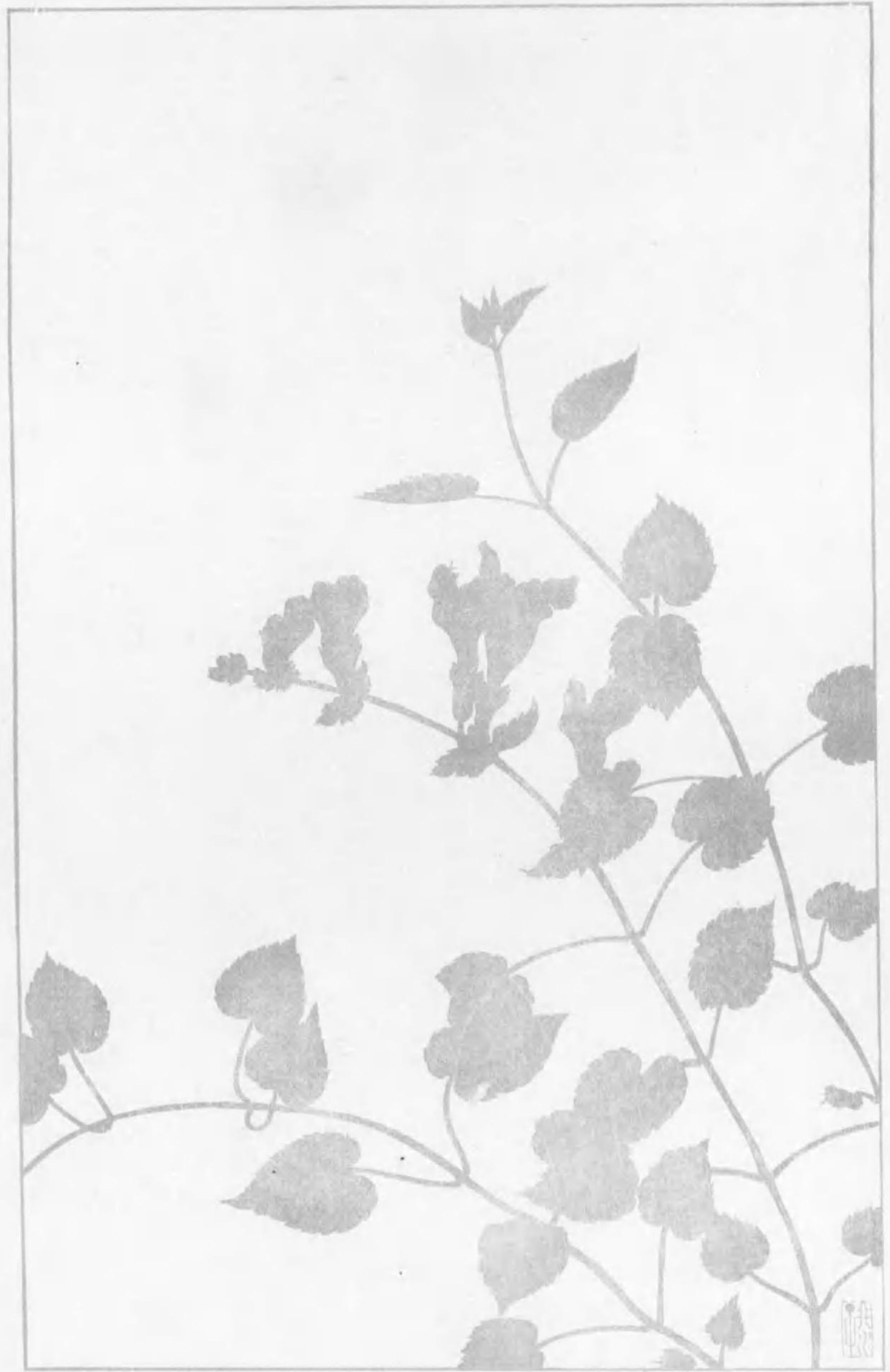
本圖 大正八年五月九日陸中志戸平温泉に於て寫生 (自然大)

附圖 (一) 印葉 (二) 上面より見たる花 (三) (四) (五) 花の側面 (自然大) (六) 匍枝の全形 (縮小圖)

寫眞 大正八年五月陸中志戸平温泉附近に於て著者撮影



精製 核源水書
大食字英和辭
春陽堂製
東京日本圖書刊行



はまなてしこ (濱撫子)

學名 *Dianthus japonicus* Thunb.

異名 ふちなてしこ、しなのなてしこ

科名 石竹科 (Caryophyllaceae)

海岸に多く生ずる宿根草本にして葉は對生、短調にして卵形又は長卵形、先端尖り、肥厚して滑澤あり。
夏期枝梢三岐し、各岐又三枝を出し、枝毎に更に短かき花梗を出して三花を頂生す。即ち聚繖花序の如き圓錐花叢をなし、概形恰もナデシコに似たり。

五瓣花は萼色を帯びたる淡紅色にして各瓣凡そ五六分、其の基部は狭長、深く萼内に藏せられ、先端廣潤、萼外に略々直角をなして反開し、縁邊に銀齒を有せり。萼は筒狀をなし先端五裂、尖頭をなす。子房は概ね筒形をなし二柱あり雄蕊十二個、約短く淡紫色を呈す。本邦中部、南部の各地海岸に自生すれど、宇に海を去る遠き山間に生ずる事あり。

備考

一、變種として紅色のもの、或は白色のものあり。



一 本圖 大正八年九月二十七日安房太海村海岸に於て寫生(自然大)

附圖 (一)花の側面(二)花の正面(自然大)

寫真 大正八年九月安房太海村海岸に於て著者撮影

葛門生羅
 (編輯) 大倉平兵衛
 西村 隆吉
 春陽堂發行
 四邊區橋本日本市京東



もくせい (木犀)

學名 *Osmunthus fragrans* Lour.

異名 きんもくせい、きんもくせい。

漢名 巖桂、木犀。

科名 木犀科 (Oleaceae)

本邦及び支那に産する常緑灌木にして高さ十五六尺に達するものあり。葉は先端尖れる橢圓形にして對生し、其質堅く縁邊に多數の細鋸齒あり。秋期葉腋に多數の小花を簇生す。香氣頗る強くして四邊に漂するが故、觀賞用として庭園に栽培せられ、且「香の花」なる意味を有する (*Osmunthus andersonii* Lour.) 學名を與へらるるに至れり。

花は小なる白色又は黄色に赤味を帯べる合瓣花にして白色のものをキンモクセイと云ひ、黄色のものをもキンモクセイと云ふ。兩性、放射相稱をなし、萼は小さき鐘狀にして合瓣花冠は深く四裂し、幼時は覆瓦狀をなす。雄蕊は二個にして心皮と互生し、短き花絲と大なる葯とより成り、葯は殆ど其の基底に於て花絲に着生す。子房は二室にして合一せる二個の心皮より成り、花柱は肥厚し、柱頭二分す。胚珠は各室にありて其の頂端より側膜胎座上に懸垂し、胚は眞直なり。果實は一個の種子を有する石果にして肥厚せる軟骨狀の内果皮を有す。

本圖 (金木犀) 大正八年十月十日東京に於て寫生 (自然大)

附圖 (一) 花の正面 (二) 花の側面 (三) 四 (印葉) (自然大)

寫真 大正八年十月東京に於て著者撮影



子 遺 漬
 杉浦水信
 大倉平兵衛
 徳田巳之吉
 那珂家發行
 西區區本町市京東



終



木
杉浦非水畫
大倉半兵衛刻
春陽堂發行
四道區編纂部東京